

平和の木に、思いを乗せて

——福島県喜多方市で、広島・被爆樹木を植樹——

「ヒロシマ、フクシマ、被爆樹木の植樹」。この3つのワードが並べば、勘の良い人なら、およその内容も想像できようし、それが希望を与えるであろう素晴らしい活動だと想像できる。ところが、取材を終えて帰ろうとしたところ、関係者の皆さんから口々に「良い記事にしてください」と追い打ちを掛けられてしまった。さりとて恐ろしいプレッシャーを受け、笑顔と冷や汗と共に帰途に就いた……。それはさて置き、まずは今回のいきさつから。

ヒロシマの被爆樹木をフクシマへ

1945年8月6日、広島市に原爆が投下された。一面、焼け野原となり、この先「75年は草木も生えない」といわれた。ところが、人間の予想などど吹く風と木は新たに芽吹き、同市では爆心地から2km以内で芽吹いたそれらの木々、約170本を被爆樹木として登録した。その木々を長年守り続け、さらに年に1回、市民の前で公開治療を行って、命と希望、平和の物語を伝えている人がある。樹木医の堀口力氏だ。堀口氏は現在、広島市の市民団体グリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアティブの一員として、被爆樹木の種や苗木を国内外に広める活動も行っている。

広島で被爆し、その芽吹いた木々を見て「大変な勇



(写真左から) 佐原氏、遠藤市長、川妻氏、鈴木氏が植樹

気をももらった」というロータリアンがいる。川妻二郎氏は1927年5月生まれ。広島大学1年生だった18歳の時に被爆し家族を失うという、とても悲しい体験をしている(『友』2018年2月号横組みP8~9参照)。

広島南ロータリークラブ(RC)に入会し、2002-03年度、第2710地区のガバナーを務めた川妻氏は2016年に東京米山友愛RCに移籍した。そこでの新たな活動として、堀口氏の協力を得て、会員たちと共に国内外に被爆樹木を広げる活動をスタート。国際大会の際には、その開催地において記念植樹を行い、平和へのメッセージを発信している。

川妻氏の友人で、第2530地区パストガバナーの佐原元氏(喜多方RC)は平和を願うその志に打たれた。特に福島県は2011年の東日本大震災以降、風評被害も含め福島第一原発の事故による影響を受け続けており、被爆樹木の姿は多くの県民に勇気を与えてくれると考えた。そこで川妻氏に連絡し、今回、東京米山友愛RCから国内で初めて、計5本の被爆樹木を贈ることにした。

娘のように育てた桜

4月21日、佐原氏が理事長を務める喜多方市の特別養護老人ホーム・ほほえみの敷地内に、遠藤忠一市長、堀口氏、喜多方RCや東京米山友愛RCの会員ら関係者が出席し、被爆したソメイヨシノから接ぎ木された苗木1本を植えた。

寄贈された苗木は、この日植えたソメイヨシノのほか、種から育てられたイチヨウ2本とエノキ2本。うち1本は喜多方市に贈り、その他は植樹するにふさわしい場所に、順次植えられるという。

堀口氏によると、被爆樹木は年輪年代法(気象条件によって形成される年輪の幅)が通常の樹木の法則から外れているものが多く、本来重力に逆らって上に伸びるはずの幹が、曲がりくねっているそう。今回贈られたソメイヨシノは接ぎ木による苗木だが、根付いて生長する確率が低く、まさに「苦勞して育てた娘を、嫁に送り出す気持ち」と語っていた。

その一方で、種から育てた被爆樹木2世は、むしろ強く育ち、堀口氏は「私見ですが、被爆という大変な状況を生き延びるほどの木から生まれた種ですから、もともと強い生命力が宿っているのでは」という話だった。



佐原 元氏

川妻 二郎氏

堀口 力氏

平和にかけの思いに触れて

植樹の後、施設内に会場を移し、会合が開かれた。その場で川妻氏は原爆投下直後に見た広島の様子や、自らの体験を語った。それを参加者たち、特に佐原氏は沈痛な面持ちで聞いている。

「二度と核兵器を使わせてはいけない」「人生で残された歳月を、平和のために尽くしたい」

このとき90歳、5月には91歳を迎える川妻氏の言葉には、体験者の重みがある。カメラのファインダー越しに表情を捉え、その後も語りかける表情を見つめながら話を聞いた。言葉選びは常に編集者を悩ませるが、川妻氏の思いを、単に「奉仕」という言葉で済ませることに抵抗がある。「平和への夢、もっと強く「平和への渴望」と言ったら、少しはそこに近づけるだろう」。

“あと10年……”続けたい、と川妻氏は話を結んだ。喜多方RCの鈴木朝男会長も「クラブとしてしっかりと管理していきたい」と。佐原氏は「これは平和運動であり、そのシンボルとしてこの木を守っていききたい」と決意を語り、川妻氏と握手を交わしていた。

木と人の間に、思いは通じるか

話は前後するが、喜多方市は福島県の北西部、会津



喜多方市のシダレザクラ並木は満開。多くの人が訪れていた

盆地北部にある。震災時は県東部地域と比べれば、大きな被害を受けなかったという。しかし、原発事故後の避難先として今も100人以上の被災者が暮らし、市内の安全性を示すため、「震災関連情報」として主だった施設の放射線測定値を発表している。

私は東海地震が発生した場合に被災が予測される地域に生まれた。小学校に上がると、地震発生の警告と避難訓練が続いた。それがトラウマとなった友人の一人からは、今も日常的に地震情報を確かめている、と聞いた。福島の事故は既に起こったことではあるが、放射線の数値を気に掛けながらの生活を想像する時、一日も早く、そこから心が解放されることを望む。

また、会合の後、堀口氏に私の母親の話をした。兄が生まれた日、両親は家の前にヤマザクラの苗木を植えたが、毎年、開花直前になると母は「木の幹が真っ赤になったね。力を込めて頑張っているから、もうすぐ花が咲くね」と言い、実際にその通りになった。実は私には全く分からず、そんなことが分かるものだろうか聞いた。すると、堀口氏自身も「木が訴えてくるというか、そう感じる瞬間がある」という。普通の人には分からなくても、木のことを思う人であれば、「分かるのだろう」と。

車窓から見た会津地方はサクラが満開だった。喜多方駅の近くにもシダレザクラの続く道があり、多くの人が花を見つめていた。花が散れば、また次の花が咲くまで、ほとんどの人は木を見に来たりはしない。どんな生い立ち、由来があろうと、木はただの木にすぎない。しかし、その木に思いを寄せる人、その思いに共感する人があれば、それはただの木ではなくなるのだろう。

今回植えられた被爆樹木が、より多くの人のたちの思いを受けて育ち、平和への願い、復興に向けた勇気の象徴となるよう、私も共に願いたいと思った。(取材:『友』編集部 黒野 稔二)

